

人口還流現象の世代間比較分析  
淡路島進学高校卒業者にみる還流の実態と可能性

論文要旨

現在、日本の国土面積の 68.1%を中山間地域が占めており、同時にそれら地域はわが国の農業などで重要な位置を占める。これら地域においてはこれまで、若者の帰還意志に対する地域条件の不整備等から、若年層の出身地への帰還は減少していると指摘されてきた。

本研究は兵庫県淡路島を事例に、地方圏における人口還流現象について、世代間でその動向を比較分析することにより、世代間における人口還流の構造、量、要因などの変化を把握し、その実態と将来像の解明を試みたものである。同窓会名簿分析、アンケート調査、ヒアリング調査を通し、地方圏出身者の還流実態として、以下の点が明らかとなった。

地方圏出身者の U ターン率は一貫して上昇しており、またそれは、きょうだい数が減少する中において、世代継承率をも上昇させるほどの規模であった。そもそも淡路島内において極めて就業の場が限られていた 1945 年生まれ世代は、その多くがいったん島外で就職をしている。しかし、その後 淡路地域における雇用受け皿が最低限までは確保された中で、1955 年生まれ世代以降は、きょうだい数の減少、それに伴う長男の割合の増加、「跡を継がなければならない者」の増加を背景に、U ターン率を大きく上昇させていた。一方で、淡路島内における就業先にはやはり選択幅は狭く、U ターンを実行した者の多くが、職に対するミスマッチを感じており、同時に都市に比した不便・退屈さに不満を抱えている者も若い世代ほど多い。このような不満の中で、淡路島に U ターンを実行した者のうち 15.7%もが再び島外へ再流出していた。

このような分析を踏まえ、わが国における人口還流現象は新たな時期を迎えているということが出来る。これまで懸念されていた若者の出身地への非帰還はそれほど深刻ではなく、U ターン率は一貫して上昇している。彼らの、家族や故郷に対する意識も高まっており、今後の若い世代にも一定規模の U ターン者は見込まれる。しかし、U ターン後の不満による地域外再流出という新たな現象が多く起こっており、地方圏は、U ターン実行者に対するその後の選択度・自由度を高めてゆく必要がある。本研究ではその可能性の 1 つとして、「地方と都市における生活圏の相互浸透」を提示した。

キーワード

- 1) 人口還流    2) 再流出    3) 世代間比較    4) 淡路島    5) アンケート調査